

名古屋電気学園
クラブ活動だより

愛知工業大学
 愛知工業大学名電高等学校
 愛知工業大学名電中学校
 愛知工業大学情報電子専門学校

令和3年春季版

(令和3年5月14日)

中高卓球部、そろって選抜大会制覇！



高校は堂々の6連覇！

第48回全国高等学校選抜大会(3月25～28日・三重県サオリーナ)で、高校卓球部が堂々の6連覇を果たしました。大会を通して誰一人として負けることなく、全試合をマッチカウント3-0で勝ち上がるという完全優勝を成し遂げました。

大会には、1月の全日本ジュニア男子を制した濱田一輝、同じく準優勝の鈴木颯、3位の篠塚大登と岡野俊介、ベスト8の谷垣佑真、2020年全日本ジュニア優勝の吉山僚一という最強の布陣で臨みました。決勝の相手は、3大会連続で同一カードとなる野田学園(山口)です。1番鈴木、2番篠塚、3番濱田、4番谷垣、5番篠塚というオーダーで対戦した名電は、ライバルにつける隙を与えず、3番濱田でチームの優勝を決めました。

今大会は、従来の1複4単から5シングルスに試合形式を変更(1選手のみ2試合に出場可能)して行われました。今枝一郎監督は「全日本でベスト4を独占したメンバーが、愛工大名電の強さを見せようとさらに燃え、大会に向けて気合が入っていました。生徒個々の実力はもちろんですが、練習に対する姿勢、大会に向けての相手の分析や自分の調整など、名電卓球部史上最強のチームで大会に臨めたと思います」と振り返ります。コロナ禍の波乱を教え子とともに乗り越えてきた今枝監督は、これまで部活動を支え、大会開催に尽力したすべての関係者に厚くお礼を述べ、「この結果に満足するこ



キャプテンの篠塚大登



鈴木颯



濱田一輝



谷垣佑真



吉山僚一

となく、夏のインターハイ、そして世界、夢のオリンピックへと目を向け、日々精進したいと思います」と、さらなる活躍を誓いました。

中学は王座を奪還！

第22回全国中学選抜大会（3月27～28日・島根県立浜山体育館）で、中学卓球部が優勝を飾りました。6連覇で迎えた前回大会（2018年度。2019年度はコロナ禍で中止）で逃してしまったタイトルを、見事に奪還しました。

同部は、準決勝で前回王者の中間東をストレートで退け、前回準決勝で苦杯を喫した野田学園（山口）と決勝でぶつかりました。1番に準々決勝、準決勝と出番がなかった杉浦涼雅を起用し、セットオールで末に競り勝って大きな先



吉山和希



杉浦涼雅



制点を挙げました。2番吉山和希がストレート勝ちし、一気に王手。3番坂井雄飛が1-3で落とすも、4番の渡邊康靖が粘りのプレーで勝利し、王座返り咲きを決めました。

2018年度に全中、選抜ともに連覇を逃した同部でしたが、2019年度の全中で王座を奪還し、コロナ禍で団体戦を経験できなかった1年を経て、選抜のタイトルも取り返しました。

真田浩監督は「初日は、緊張から皆自分のパフォーマンスを発揮することが大変困難な状況でした。併せて、通常なら5セットマッチで行われますが、簡素化のため予選リーグのみ3セットマッチで行われたことも影響して、プレッシャーはかなりのものだったと思います。エース吉山も初日を振り返り、『手が震えて頭が真っ白になったのは初めてだった』と述べました。『次どうする』のキーワードを頭に叩き込んで、戦い続けるように心掛けた決勝トーナメント

※中高選抜卓球の写真は、いずれもニッタクニュース提供



坂井雄飛



渡邊康靖



菅沼翔太

では、皆が自分とチームメイトを信じることができ、優勝することができました」と、熱戦の跡を振り返りました。

高校フェンシング部は21年ぶり3度目の選抜制覇！ 初出場女子も準優勝！



男女そろって大活躍した高校フェンシング部

第45回全国高等学校選抜フェンシング大会（3月28～31日・丸善インテックアリーナ大阪）の男子学校対抗フルレの部で、高校フェンシング部が21年ぶり3度目の優勝を果たしました。男子はエペでも準優勝し、さらに初出場の女子もフルレ準優勝を勝ち取りました。

選抜大会はコロナ禍によって2年ぶりの開催でした。男子は学校対抗フルレの初戦（2回戦）から接戦を勝ち抜き、決勝で優勝候補の立教新座高（埼玉）と対戦しました。終始リードを許す展開ながら、弓長昇主（エペ17歳以下日本代表）が4点差まで縮め、36－40というポイント差で最終試合を迎えました。最終試合は本校のエース河村一摩が9－4のスコアで相手エースを破り、チームスコア45－44と逆転して優勝を決めました。

女子は昨年11月に競技未経験の部員を迎え、団体戦に出場できる3人がそろいました。学校対抗フルレ2回戦で優勝候補の東亜学園高（東京）と当たり、33－40とリードされた最終セットで、エース山田ひなたが鮮やかに逆転し、波に乗りました。

川嶋範夫部長は「今までにない戦績を残し、コロナ禍という練習が制限された中での優勝は思い出に残るものでした。男女それぞれのエースである弓長昇主、山田ひなたの大活躍により得られた結果で、夏の大会に向けての励みとなりました」と手ごたえを話しています。

全日本卓球・名電がジュニア男子表彰台を独占

丸善インテックアリーナ大阪（大阪市中央体育館）で1月11～17日に無観客開催された全日本卓球選手権大会で、高校卓球部の濱田一輝がジュニア男子シングルス初優勝を飾りました。今大会では名電の選手たちがジュニア男子の表彰台を独占したほか、男子シングルスでも大学の田中佑汰が東京五輪代表の丹羽孝希選手を破る金星を挙げました。

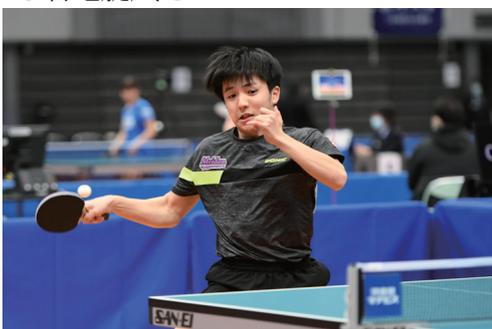
ジュニア男子では、高校の濱田一輝、鈴木颯、篠塚大登、岡野俊介が堂々のベスト4入り。さらに高校の谷垣佑真がベスト8入り、中学の萩原啓至、加山雅基、中村煌和がベスト16入りと、今年も名電旋風を



初優勝の濱田一輝



男子シングルス3位の田中佑汰



準優勝の鈴木颯



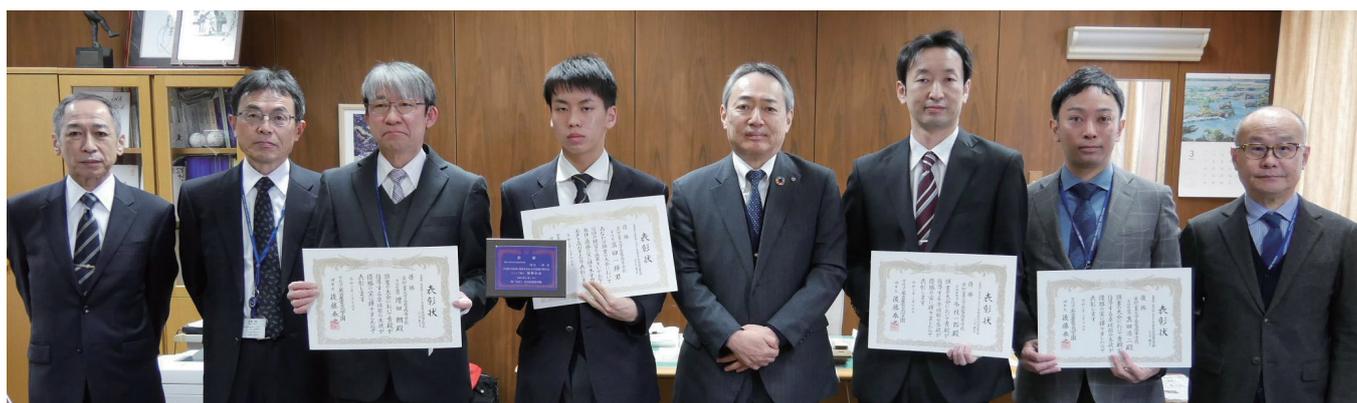
3位の篠塚大登と岡野俊介

（写真はいずれもニッタクニュース提供）

巻き起こしました。濱田と鈴木が頂点を争った決勝では、持ち前の気持ちの強さに加え体力面の強化に取り組んできた濱田が、同士討ちを3-1で制して念願の初優勝を遂げました。

男子シングルスでは、大学の田中佑汰が準々決勝で丹羽孝希選手と対戦。格上選手を4-2で下し、躍進の3位入賞です。さらに高校の小林広夢と曾根翔がベスト16入りし、大学OBの吉田雅己も3位入賞の好成績を収めました。

濱田選手と高校卓球部を学園表彰



学園表彰された濱田一輝選手（左から4人目）ら

学園は3月19日、全日本卓球選手権大会（1月・大阪）でジュニア男子シングルス初優勝を飾った高校卓球部の濱田一輝選手と優秀な成績を収めた同部に対して学園表彰を行いました。

大会では、ジュニア男子ランキング1位の濱田選手をはじめ、2位の鈴木颯選手、3位の篠塚大登選手、4位の岡野俊介選手、5位の谷垣佑真選手と、同部員が上位を独占しました。

表彰式は高校校長室で行われ、後藤泰之理事長が濱田選手と今枝一郎監督ら同部の指導者たちに「今後もプレッシャーに負けないように練習を積んでほしい」と声をかけ、表彰状を手渡しました。愛名会からもお祝いが贈られました。これに答え、濱田選手が「選抜大会でも優勝という結果で恩返ししたい」、今枝監督が「これに満足せず上を目指し、来年度のインターハイにつなげていければ」と、さらなる活躍を誓いました。

松山が学生全国大会初V！高見、上田も準優勝

全日本学生選抜



初優勝の松山祐季



準優勝の高見真己



女子準優勝の上田真実（写真は
いずれもニッタクニュース提供）

卓球の全日本学生選抜強化大会（全日本学生選抜選手権大会の代替大会、男女ともにシングルスのみ）は11月28～29日、神奈川県横浜武道館で無観客開催され、本学男子

卓球部の松山祐季（4年）が初優勝を飾りました。本学選手は、このほか高見真己（3年）と女子の上田真実（4年）が準優勝、女子の松本静香（4年）もベスト8に入賞しました。

男子は、準決勝で松山が戸上隼輔選手（明治大）に、高見が宮川昌大選手（同）に、それぞれ勝利。同士討ちとなった決勝は激しいラリー戦の末、主将である松山が先輩の意地を見せてフルゲームの熱戦を制しました。松山にとって、これが学生全国大会（個人）での初優勝となりました。女子の決勝も、上田が粘りを見せてフルゲームまでもつれる熱戦になりました。

松山祐季選手と大学卓球部に対する学園表彰が1月25日、八草キャンパス本部棟で行われました。名古屋電気学園愛名会からもお祝いが贈られました。松山選手と鬼頭明大学卓球部総監督、森本耕平大学男子卓球部監督に対し、後藤泰之理事長が「コロナ禍による制限の中、集中して練習できた成果が出



後藤泰之理事長を囲んで、学園表彰を受けた松山祐季（右から2人目）ら

た」とお祝いの言葉を贈りました。これを受けて、春に卒業する松山選手は「またよいご報告ができるように頑張ります」と、この後も社会人選手として活躍する決意を述べました。森本監督は「いまのように学園の選手が全国大会で優勝している流れは、先陣を切ってやってくれた松山の存在が大きい」と、後輩たちを引っ張ってきた松山選手の頑張りをたたえました。

2020年度後期日本卓球リーグ熊本大会で3位



後期大会3位の男子卓球部（写真はニッタクニュース提供）

日本卓球リーグの今年度後期大会（前期大会は中止）は11月11～15日、熊本県立総合体育館で開催され、本学は4勝0敗3引き分けで惜しくも3位の成績でした。

本学チームは松山祐季（4年）木造勇人（3年）高見真己（3年）田中佑汰（2年）中村光人（1年）の5選手が出場しました。大会は、本学を含む3チームが最終戦まで優勝を争う展開になりました。個人表彰で、主将の松山がファインプレー賞を受賞しました。

JOC ジュニア・オリンピック・カップで弓長昇主が優勝

フェンシングの第28回JOCジュニア・オリンピック・カップ（1月7～10日・駒沢オリンピック公園体育館）男子17歳以下エペで、高校の弓長昇主が優勝しました。新型コロナウイルスの影響で1年前のこの大会以来の公式戦出場となった弓長は、ベスト8だった前回から躍進しました。今大会では高校卒業生の加藤響（中央大学）も男子20歳以下サーブルで3位の成績を収め、弓長とともに世界ジュニアカデ選手権大会の出場権を手に入れました（新型コロナウイルス感染リスクなどを考慮して日本代表の派遣は見送り）。

中学・高校の選手たちは、このほかにも男子17歳以下サーブルで高校の堀智貴が4位、男子20歳以下フルーレで高校の太田拓輝が7位、女子17歳以下フルーレで高校の山田ひなたが7位、女子17歳以下サーブルで中学の金高生幸が8位などの成績を収めました。



男子17歳以下エペで優勝した弓長昇主

高校チアリーディング部が JAPAN CUP7 位入賞



チアリーディングスピリッツ部門

わが国最大のチアリーディングの大会「JAPAN CUP2020 日本選手権大会」（11月13～15日・国立代々木競技場第一体育館）で、高校チアリーディング部（チーム名「THUNDERS」）が、チアリーディングスピリッツ部門の7位入賞を果たしました。さらにスモールグループ演技競技部門でも、Division 1（各校の1チーム目が出場）10位、Division 2（同2チーム目が出場）4位の好成績を収めました。



スモールグループ演技競技部門

チアリーディングスピリッツ部門は、モーション、ジャンプ、ダンス、タンブリングを組み合わせた1分30秒の演技。今年度、感染症の影響を踏まえて新たに設立されました。THUNDERSは他チームよりジャンプの数を多く演技に取り入れ、決勝では練習以上に息の合った演技ができ、高さが変わらないジャンプが高評価を得ました。5人グループのスタント競技であるスモールグループでは、Division 1で高難度の演技に挑み、Division 2でノーミスの演技を決めました。

新部門のチアリーディングスピリッツは、チアリーディングの特徴であるスタントができず、チーム内でさまざまな葛藤がありました。生徒たちは休校期間中、互いに動画を送り合ったりオンライン練習したりして、個人スキルの上達につなげました。部顧問の瀬脇春菜教諭は「休校期間中の上達には目を見張るものがあり、大会への強い思いが感じられました。日々変わる状況に負けず、部員全員で今できること、今だからできることを探し、大会に向かって努力できたと思います」と振り返っています。

安藤昂佑が中部日本学生スキー選手権で回転種目準優勝

第66回中部日本学生スキー選手権大会（3月5～7日・長野県白馬村）で、競技スキー部の安藤昂佑（経営学科3年）が回転種目準優勝を飾りました。今大会には中部地区から9大学が参加。コロナ禍の影響で練習不足の中、安藤選手は初日のスーパー大回転で5位と出遅れましたが、次の種目の大回転では3位に、そして3種目目の回転で準優勝となりました。



安藤昂佑選手



西裕之監督を挟んで、安藤昂佑選手（右）と林田直樹選手（左）

安藤選手は2年前のレース中に転倒し、右足前十字靭帯断裂という大けがを負いました。手術・リハビリ、そしてトレーニングを重ねて復帰し、見事に結果を残しました。また、ノルディック種目に出場していた林田直樹（経営学科1年）も、2種目で3位に入賞と健闘しました。今回、けがなどで2選手だけの参戦となりましたが、全種目に入賞する活躍で、大学対抗総合成績でも3位となりました。

「フェンシングで子供たちに笑顔を」 クラウドファンディング利用し大会

「フェンシングで笑顔届けよう」を合言葉に、東海や近畿の10～16歳のフェンシング選手たちが参加する「アイチオープンフェンシング2021」が2月27、28日、八草キャンパス鉀徳館で開催されました。大会の発起人は、愛知県フェンシング協会常任理事でフェンシングU-20/U-17男女フルーレ日本代表コーチを務める富田弘樹・愛工大名電高校教諭（フェンシング部監督）。コロナ禍で目標を失いそうになった子供たちのため、クラウドファンディング（CF）を利用して開催費用を募りました。

昨年、愛知県フェンシング協会が6月に「2020 AICHI Fencing Festival」を計画しましたが、このイベントをはじめ、主だった大会がコロナ禍で中止に追い込まれました。これを受けて今回の企画がスタート。CFを募るにあたって世界選手権銀メダリストの西藤俊哉選手（フルーレ日本代表）が賛同し、西藤選手と同郷（長野県）の漫画アシスタント西澤啓介さんも企画に加わって、西藤選手をモデルにした漫画やイラストがSNSで公開されました。

CFで100万円余が集まり、スポンサー企業も決まって「アイチオープンフェンシング2021」は参加無料で開催されました。小学生～高校生の約100人が男女のカデの部（17歳未満）とミニムの部（14歳未満）のフルーレで練習成果を競いました。子供たちの記憶に残る大会にしようと照明など演出を工夫し、審判や会場設営には愛工大フェンシング部員たちが協力。2日間の様子はインターネットで生中継されました。

競技の結果、学園の選手たちもカデ男子で林川琉偉（愛工大名電中）が優勝するなど優秀な成績を収めました。西藤選手は日本代表合宿を切り上げて会場入りし、表彰式でプレゼンターを務めたほか、優勝の特典として、林川選手と5点マッチで剣を交える場面を披露しました。



ロボットアート部

瀬戸蔵ロボット博に文科系クラブも出展

瀬戸市の瀬戸蔵で3月24～28日に開催された「瀬戸蔵ロボット博2021」に、本学からも多彩な研究成果を出展しました。

瀬戸蔵ロボット博は、愛・地球博開催継承事業として2015年に始まりました。ロボット・テクノロジーを通じ、子どもたちにもものづくりの喜びとチャレンジする楽しさを伝え、科学・工学への夢を育てる場にしようと、3年に1度開催しています。本学の西山禎泰客員講師が瀬戸蔵ロボット博総合プロデューサーを務め、企画立ち上げ時から地域連携、産学官連携を構築・推進してきました。

3回目となった今年は、瀬戸蔵全館（1～4階）が会場になり、さまざまな体験型の展示が繰り広げられました。本学関係の展示コーナーでは、文科系クラブであるレスキューロボット研究会やロボットアート部の学生たちもデモンストレーションなどを担当し、ロボットの楽しさを伝えました。

課外活動（クラブ活動）で表彰された学生たち

●団体（在學生）

▽ヨット部

矢野聡美、服部竜樹、長岡広翔、鈴木優太、吉川裕李、高島雅久、岡田琉我、西城秀
2020年度秋季中部学生ヨット選手権大会国際470クラス1位

●個人（在學生）

▽競技スキー部

柳本理乃

FIS フリースタイルスキーワールドカップ2020（秋田・田沢湖大会）女子モーグル5位

●団体（卒業生）

▽ヨット部

柴本陸、矢ヶ崎新、加藤倭大、仲村駿希

2020年度秋季中部学生ヨット選手権大会国際470クラス1位

●個人（卒業生）

▽競技スキー部

伊原遥香

FIS フリースタイルスキーワールドカップ2020（カザフスタン大会）女子デュアルモーグル8位

▽陸上競技部

服部大暉

第47回東海学生陸上競技秋季選手権大会男子5000m1位

▽ヨット部

柴本陸、矢ヶ崎新

2020年度中部学生ヨット個人選手権大会国際470クラス2位

クラブ表彰

学園は1月～3月にかけて、全国大会に出場の各クラブに対してクラブ表彰を行いました。後藤泰之理事長が部員らの努力をたたえ、「一つでも上を目指してください」と激励しました。愛名会や高校同窓会、高校PTAからもお祝いが贈られました。

【1月7日の表彰】

▼高校ボウリング部

第27回全国高等学校対抗ボウリング選手権大会

【2月15日の表彰】

▼高校相撲部

令和2年度全国高等学校相撲選抜大会



▼高校フェンシング部

第45回全国高等学校選抜フェンシング大会

▼高校競技スキー部

第74回全国高等学校総合体育大会スキー競技

第33回全国高等学校選抜スキー大会

▼高校チアリーディング部

Japan Cup 2020 チアリーディング日本選手権大会

▼高校卓球部

第48回全国高等学校選抜卓球大会

【3月19日の表彰】

▼高校メカニカルアーツ部

ロボカップジュニア・日本大会2021オンライン

▼中学卓球部

第22回全国中学選抜卓球大会

▼中学メカニカルアーツ部

ロボカップジュニア・日本大会2021オンライン



発行 学校法人名古屋電気学園愛名会